

窓前花



佐藤春

窓前花

愚者の樂園改題

佐藤春夫

新潮社版

窓前花（さうぜんのはな）

昭和三十六年五月二十七日印刷
昭和三十六年五月三十一日發行

定價 三四〇圓

著者 佐藤春夫

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話卅七一―二振替東京八〇八

印刷所 二光印刷株式會社
製本所 新宿加藤製本所

落丁本はお取替えいたします。

「窓前花」自叙

この書はわたくしが去三十三年晩秋から翌三十四年、更に一年を延長して三十五年一ぱいを、讀賣新聞夕刊に「愚者の樂園」の題で書きつづけた週間日記ともいふべき隨想雜感の百餘章にほぼ同期に書かれた短文二種を併せ録して小冊子とまとめるに當つて、「愚者の樂園」の書題は、既に一度使つた人があるといふので改題したのである。

毎土曜日の朝、二枚づつの執筆に當つて、わたくしは過ぎた一週間の記憶をたどりつつ話題を心にさぐりながら、常に眼を窓外に放ち小園の花を眺めて、時の推移に驚き自然の無限の意匠を賞美し、心中に想をさぐつてこれを見出し得ない時には、しばしば眼前の花に關して語つた。世上一般の話題も亦、わたくしにとつては窓前一枝の花と等し並みに思へたからである。世情を輕んじ卑

しむのではない。花を愛することが深いのである。

猫の額ほどの土地へきゆうくつに植ゑつけられて、何の不足げもなくゆたかに花開き、情人でも親友でもないのに、にこやかに笑ひかけていつもわたくしを慰めつづけてくれる花々に對する感謝のつもりで、わたくしは少々氣取りすぎるのをも厭はず、この書を窓前^{さうぜん}花と題したのである。

申すまでもなく、愚感を自ら心の華と思ひ、拙文を讀者の窓前の花などとうぬぼれてゐるわけなどではさらさらない。

昭和三十六年 窓外春やうやく深き日、満開の海棠花の微雨に對し

東京目白坂にて 佐藤春夫しるす

窓
前
花

愚者の樂園にしばらく小人の妄説まうせつを吐く。識者は笑つて何を言はうと取り合ふまい。取り合ふご仁があれば、ご同様の小人とお互に笑ふこと。

さても余は、政治的革命といふものには懷疑的である。

要するに舊來の惡を追放することによつて新形態の惡を歡迎するのが政治的革命といふもののやうな氣がする。

それ程に余は政治といふものに不信だし、無關心どころか、積極的な關心を抱いて嫌惡けんをしてゐるのである。久しく惡政治を見慣れて現在に及んでゐるためであらう。

現在の政治にしてからがご同様十分な嫌惡に價するものと思ふ。

やれ勤務評定の道德教育のと利いた風な末梢的なことを案出して人騒がせをするよりは、一つ善政を、と申して抽象的に過ぎるとならば、まあ三惡追放でも何でもよい。口先ばかりのごまかしでないことをして見やれ。勤務評定も道

徳教育も何も必要はござるまいとよ。

共産主義はまことに合理的な、人間愛に根ざして頼もしい思想である。人間世界の指針は、今日のところこれより外には何も無いものとは不敏な余も年久しくこれを信じて疑はない。

しかし（ではないだから）僕は共産黨がきらひなのである。

この高潔で純眞な人を魅する共産思想が、政治惡の手で汚され濁るのを余は専らおそれ憂へる者である。

余は要するに共産主義哲學の信奉者であつて、共産主義、ではない一般政治の厭惡者えんをなのである。

自ら觀念共産黨と稱する所以である。余は余のこの信念による見地から、政治的な共産主義の、同志にも似た敵に、語を寄せたい。いはく、願はくば輕舉妄動してわが高潔純眞な人類救ひの思想を空しく泥土に委ねざれと。

明治二十年代後半から三十年代前半の新詩歌のはじまる當時、與謝野鐵幹は舊派の歌及歌人を徹底的にやつつてながら新派を興したが、そのほとんど同じころ島崎藤村は「新しくよいものが興れば舊いものは必ず滅びる」といふ確信の下に黙々と新詩の創作に熱中してゐた。

鐵幹は新派和歌を成り立たせると同時に多くの敵をもつくつてしまつてゐて、後年の仕事に多くの差し障りを残したが、藤村は一人の敵をもつくらなかつた。

「新しくよいものが興れば舊いものは必ず滅びる」と建設に専念した態度は、いかにも藤村らしい考へぶかい仕方であつた。

たとひ建設のための用意でも、破壊はどこまでも破壊であつて、破壊即建設と思ふのははなはだ主觀的な飛躍であらう。

子供にでもぶつ壊しはできる。衆愚^{モップ}を動かし狩り立てて破壊させることは最

もたやすい事であり、それでゐてカラ景氣がいいから人のよくやりたがる事である。

余はつらつら現代の日本を見渡して、寡聞くわぶんのせるか、黙々として建設に専念してゐると思へる人を見出すことなく、いたづらに破壊的な事象のあまりに多いのを悲しむ者である。

毛蟲は時を経て蝶てふになる。しかし破壊は決して建設には育つて行かない。

アナトール・フランスは「人間悲劇」のなかで革命家を童話風に(?)書いてゐるが、そのなかで革命者は性急であつてはならない、「祈る者のやうに靜かであれ」といふやうな一句のあつたのを余は深く心に印してゐる。

どこかで靜かに祈るやうに新しい世界を、新しい日本を、人間の新しい生活を夢みてゐる人は居ないものであらうか。

余はその哲人に、黙々として靜かに祈るやうな希望に満ちた生活者がどういふ段取で行動に移つて行くべきか、教を請ひたいと思ふのだが。

人間の價値をその人の收入できめる現代の風習の可否はそれ自體一つの問題であらう。しかし兵隊の位できめるやうな名案もない以上はまづいたし方もあるまい。

それにしても現代で最高の身入りのあるのが、少女歌手、漫畫家、運動選手と聞いては少々考へる。なるほど少女歌手はかはい。漫畫は面白い。運動の見物はわたくしにも楽しい。しかし國を擧げてのこの有様、さうしてその結果を、決して亡國の兆とまでは思はないながら、果して文化國家とやらの現象であらうか。人生は荒涼としてゐる。個人にも社會にももちろん娛樂は必要である。けれどもその比重が今日少しく均衡を失してゐるのではあるまいかと言ひたいのである。

お前、少女歌手や漫畫家が羨^{うらやま}しいのだらうつて？　ごじょうだんを。わたくしは無趣味な男でマネービルとかの趣味もなく、おマンマをいただけさへす

れば満足なのだから、まだ足を知る心境には達しないが、今ぐらゐで格別人さまを羨しがらないでもすんでゐる。第一寢食を廢してこれ以上オアシを書き集めてみても、そら國稅廳が持つて行つてくれるだけの事ではないか。

わたくしはゼニかんぢやうはいつもケタを違へる。國稅廳とも銀行ともつき合ひたくはない。それよりは猫を追つかけて遊んでゐたいものである。日向ぼっこをして睡だけ眠つては清閑をほしいままにしたあげく、興が到つてか庭に出て木にかけ登つたり、ゆつたりとすべり下りたり、奴は人間のおくせくするのを冷笑してゐるかに見える。吾輩ハ猫デハナイ。ななたび生れ變つて君に忠を盡したいと思はないし、また七度生れ變つて文章を書きたいと思はない。文章書きは今生の一度で、もう澤山である。今度は一度猫にでも生れ變つて美人の膝に高臥する猫生を味ひたいものである。人間を萬物の靈長と思へなくなり、禽獸きんじうにも劣ると思ひはじめたのは同類への侮辱で、多分ダラクといふものなのであらう。

この間さる出版社がかねてから出してゐる少年のための現代文學の叢書のためにわたくしのものも一冊加へたいといふ。そんな本は今までにもあつたし、何冊も賣れるものかどうか知らないが、そんなことは出版社の考へることであつた。わたくしの問題ではない。わたくしはわたくしの立場から喜んで引受けると、その書を飾るために色紙を一枚書けといふ。果して飾りになるかどうかわからないやうな惡筆だが、書家ではないから字の拙いのはいたし方もない。しかし文學者だから文句は人に笑はれたくない。せめて文句だけはをかしくないことを、といふのがわたくしの、こんな場合のいつもの苦勞である。

そこで、この時、考へた末に書いたのは、

「自然の美と友情の世界に安住したい」

と書いた。これはわたくしの日常の願望で、大げさにいへばわたくしの人生哲學のエッセンスのやうなものである。それをすなほに簡單に言つてみたつも

りであつた。

このエピクルスのやうな言ひ分の眞意が果して少年や少女たちに通じるかどうか、わからないけれど、その表面の意味だけはわかつてもらへるだらうし、少年の清純な心情を傷つける心配のない名文句のつもりである。

名文句だとはうぬぼれてゐる。しかしこの願望は一種の無いものねだりだとは書いてしまつてからもしばらく、といふのは今のさつきまで氣がつかかなかつた。

自然の美などといふものは現代の刻々に破壊してゐるところだし、自然の美などといふ言葉自體、現代の人が聞けば時代おくれののんきな感覺と笑ふに違ひない。友情と戀と智慧の石とは既にハイネが世にない三つのものに數へ上げたほど見つけ出しにくいものである。ましてやその世界に安住などとは至難中の至難事であつたか。しかしひるがへつて考へるに、わたくしの願望すなはちあの名文句は決して間違ひではない。これを実現させないのは現代社會の間違ひなのである。しよせんわたくしは現代人ではない。

また文化の日と木枯しの季節とが来た。木枯しと文化の日とは、またへんな取合せだと思ふかも知れないが、わたくしにとつては、きらひなものと好きなものとがつづいて来るので毎年この季節が印象深いのである。

わたくしは文化の日や藝術祭などは大きらひである。といふのは最も非文化的、非藝術的なものだからである。文化の日とは國に文化の無いことを言外に自白してゐる日であらう。日日、文化のある眞の文化國に何で一年に一日だけ文化の日を制定する必要があるか。祭日は結構であるがいかにも氣の利かない、非文化的な名前のやうな氣がしてきらひなのである。

文化といふものを學藝に限るやうな考へ方にもわたくしはうたがひを持つ、文化とは日常生活一般に好き秩序のある状態をいふものと思つてゐるわたくしは、今日このごろの混亂を極めた時代に文化の日のあるのをコツケイ千萬なものに思ふ。しかしそれだから文化の日も必要なのだなと考へ直してみても、わが